

# 宗教の真理性とプラグマティズム —ジェイムズの実在論の観点から—

林 研

(和文要旨)

ウィリアム・ジェイムズは『宗教的経験の諸相』などの著作で、プラグマティズムの論理を用いて宗教が客観的に真理でありうることを主張した。プラグマティズムは多元論を伴うことから宗教的真理を相対主義的に考える論者が少なくないが、ジェイムズは対象の実在性を認める実在論の立場に立つ。しかしこの多元的な実在論についてジェイムズは明確に論じていない。後の時代、ヒラリー・パトナムは古典的プラグマティズムから着想を得て、自らの実在論を多元的なものとして構築した。これは、ジェイムズのヴィジョンを現代的に再構築したものと見ることもできる。そのパトナムの理論をジェイムズの著作と関連させて論じた研究が複数あり、ジェイムズが想定していた多元的な宗教的実在論の輪郭が浮かび上がってきた。ジェイムズは信仰者が実践の中で捉えた神的実在の知識を、その実践の文脈における可謬的だが客観的な真理であるとして、個人的な信仰を公共の場に開いて行こうとしたのだと考えられる。

(SUMMARY)

In *The Varieties of Religious Experience* and other works, William James uses the logic of pragmatism to assert that religion can be objectively true. While many thinkers have pointed out that, since pragmatism involves pluralism, pragmatic religious truths can only be relativistic, James' idea of realism recognizes the reality of objects. He did not, however, explicitly explain this pluralistic realism. Somewhat later, Hilary Putnam, inspired by the ideas of classical pragmatism, constructed his own pluralistic realism, which can be seen as a modern reconstruction of James's vision. Several studies have examined Putnam's theory in relation to James' writings, and the outlines of the pluralistic religious realism envisaged by James have come into focus. This study argues that James takes the position that the knowledge of divine reality attained by believers through their practice, although fallible, is objective truth in the

context of that practice, and that personal faith can therefore develop within the public realm.

## 1. 序

「真理」について問う場合、真理の定義や基準といったことと同時に、真理がどのような性質のものなのかが問われる。例えば論理学では真とは偽ではないこと、いわゆる「二值的」なものである。日常生活でも基本的には真理を間違っていないことという二值的な意味で考えるが、もう少し曖昧かもしれない。では宗教についての真理とはどのようなものだろうか。

宗教的真理は、特に科学との関係の中で様々に解釈されてきており、近現代では「主観的真理」や「実存的真理」という言い方で正当化されることが増えている<sup>1</sup>。こうした場合、その真理性は偽と対置されているとは言い難い。それはいわゆる「客観的な真理とは別のものと見るべきであろう。

ウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842-1910）は『宗教的経験の諸相』（以下、『諸相』と略記）などの著作において、プラグマティズムの論理を用いて宗教を真理と認める議論を展開した。このとき、ジェイムズはどのような性質の真理としてこれを主張したのだろうか。プラグマティズムは基本的に、二值的な意味で真を偽から区別することのできる方法である。しかし同時に、プラグマティズムの考え方は相対主義的な真理觀に接近する傾向がある。

リチャード・ローティ（Richard Rorty, 1931-2007）は「言語論的転回」を経たネオ・プラグマティストとして、真理を言語使用上の整合性であると理解し、「本質」の存在を拒否する。宗教について言うなら、神や仏が実在するかどうかは最初から問われないことになる。真理であるかどうかという問い合わせ、「対象が本当に実在するかどうか」は除外されるのである<sup>2</sup>。この論理であれば、確かに宗教の真理性を保証できる。しか

<sup>1</sup> これらは、宗教に関しては「信仰対象が客観的に存在するかどうか」ではなく、「信仰者が信仰対象との関係において真理の内にあるか」こそが重要だと捉える見解である。例えばキエルケゴールは、「主体的（主観的）真理」を主張している。その意味は、神についての客観的認識に依存せずに、自己の内面において神との眞の関係を選択することであり、実存のあり方としての真理である。ここには、有限な人間に神を完全に認識することは不可能であり、そうした不完全な認識に基づいて信仰することを、むしろ眞なる態度ではないと見る視点がある（伊藤潔志「キルケゴールにおける人間存在と教育」、『山陽学園短期大学紀要』 第42巻、2011、23~25頁参照）。

<sup>2</sup> デューイは、ジェイムズと同様にプラグマティズムによって宗教を擁護したが、神的な実在といったものはまったく想定していなかったように見える。ローティも含めて、あくまでも人

しそれは一般的の信仰者の素朴な信仰からかけ離れてはいないだろうか。

ジェイムズはプラグマティズムによって宗教的真理を擁護したが、彼は宗教を論じる際、いつも一般的の信仰者を考慮に入れることを忘れなかった。ジェイムズが宗教の真理性を理論的に担保しようとするなら、「本当に実在する」という感覚を除外するとは考えにくい。

しかし素朴な信仰にも問題がある。例えば「普遍的な唯一の神」を客観的事実と認めることは、他の宗教を偽とみなすことになりかねない。このことは多様な宗教が混在している現実世界にふさわしい見解ではないだろう。その点で、ローティの相対的な真理観は宗教の多元性を難なく可能にする。

ジェイムズの立場はおそらくこの中間にある。プラグマティズムによって宗教的真理の多元性を担保すると同時に、その信仰が「本当のこと」であり間違ってはいないとする、困難なスタンスである<sup>3</sup>。本稿ではジェイムズがこの困難な立場をどのように成立させようとしていたのかについて、「実在論」に関する哲学的議論をモチーフとしながら検討する。

## 2. ローティの批判と『諸相』の意図

プラグマティズムは1870年代にチャールズ・S・パースによって創始されたが、これに真理論としての意味を与えたのはジェイムズである。ジェイムズは1898年の講演「哲学的概念と実際的効果」でプラグマティズムを広く紹介し、その後『プラグマティズム』(1907)に至る間にプラグマティックな真理の意味について考察を推し進めた。

プラグマティズムの真理論は、真理を動的なもの、人間的なものと捉える。人間は、行動の中で「うまく働く」観念を真理とみなすのであって、あらかじめ存在する絶対的な真理といったものは否定される。ジェイムズはこうした理論を紹介するときに好んで宗教の話題を用いた。例えば、有神論はそれを信じて生きる人々の人生を生き生きとし

間の実践にとっての価値として宗教を扱う態度は、プラグマティズムからのひとつの回答と言える。

<sup>3</sup> 宗教の多元主義と言えば一般にジョン・ヒックが有名である。ヒックは究極的実在を想定した上で、各宗教をそれぞれの文化に依存した把握の仕方の違いとみなす。これは最初に実在を置く時点で形而上学的な態度であり、経験的なアプローチを取るプラグマティズムとは対照的である。また、この見解では各宗教の固有性が損なわれるという批判もある。ジェイムズの目指すところは、ヒックよりも理論的に困難な道と思われるものの、様々な信仰をそのまま真理とみなして経験の次元で検証していくものであるため、ヒックに寄せられる類の批判は回避することができる。

たものにするがゆえに真理としての資格を得るのである。

そして 1902 年には『諸相』が出版される。ここでジェイムズは膨大な宗教的経験の手記を引用しながら宗教現象を分析し、後半ではプラグマティズムの論理を軸に宗教の真理性を論じた。

しかし、先述のようにプラグマティズムの論理自体は本質や実在を問う必要性を持たない。その点に関してローティは、ジェイムズのプラグマティズムに敬意を払いつつ『諸相』に不整合が見られると批判している。

その不整合はジェイムズが超自然主義を、人にとって善いと思われるがゆえに真であろうと論ずるのか、それについての経験的証拠が十分あるがゆえにそれが実際に真であると論ずるのかの間で心を決められなかつたことから来ている<sup>4</sup>。

『信じる意志』と、ジェイムズがリューバから引用した文章の両者は共に、私たちの感情はある場合において私たちの信念に命じる権利を持つことについて、まったく明確である。両者は共に、こういった事柄において、「しかしそれらの信念は客観的に真なのか？」という形の問題が残らない点について明確である。しかしジェイムズは「結論」においてその問題を真剣に取り上げ、争点をうやむやにしている<sup>5</sup>。

つまりローティは、「客観的な真」を問う姿勢は形而上学的であってプラグマティストの取るべき態度ではないと言うのである。

実際のところ、『諸相』では神的なものの実在が端々に暗示されている。例えば「結論」の章には「靈的エネルギーが流れ込んでいて、心理的あるいは物質的な効果を現象世界の中に生み出す」<sup>6</sup>とあるが、この「エネルギーの流入」については宗教現象における事実として随所に示されている。そして「後記」においてはこの信念をもって自身を「超自然主義者」であると表明している<sup>7</sup>。しかしこうした見解は、プラグマティズムの立場からは必ずしも表明する必要のないことである。ジェイムズはなぜこうした議論

<sup>4</sup> Richard Rorty, "Some Inconsistencies in James's Varieties," *William James and a Science of Religions* (Edited by Wayne Proudfoot), Columbia University Press, 2004, p.86.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p.94.

<sup>6</sup> William James, *The Varieties of Religious Experience* (1902), *William James: Writings 1902-1910*, The Library of America, 1988, p.435.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.465.

を排除しようとしたかったのだろうか。

もちろん、ジェイムズが実際に実在を信じていたから書いたのではあるだろう。しかしそれだけではなく、ジェイムズは「本当に実在する」と考えることによるプラグマティックな効果を想定していたのではないだろうか。ジェイムズは心理学者としてのキャリアを反映して、人間の心理的な状態を現実的なものとして重視する。プラグマティズムは「観念の差異が行為の差異となり現実に差異をもたらす」という洞察を基調とするが、ジェイムズはこのプロセスの中に（観念と行為の間に）含まれる人間心理の差異を強調している。

『諸相』に先行する論文集『信じる意志』においてジェイムズは、「ある事実に対する信仰がその事実を生み出す助けになりうる」<sup>8</sup>場合が実際にあることを繰り返し強調している。宗教を心から信じることは宗教の効果を高めるであろう。このとき、効果によって真理性を判定するなら、信じることによって宗教が真理になるとも言える。

このことを考えた場合、例えば「神が本当に実在する」と信じることと、「神は言語使用における整合性によって共同体内で真理とみなされる」と信じることとでは、効果が異なって来ないだろうか。効果を考えるならば、宗教が十全に効果を発揮するために、実在として信じることが望ましいのである。

もちろん、効果によって見解を変えるとすれば不誠実だが、ジェイムズは宗教的実在論者であり、そのことは「後記」から見て取れる。そうであれば、自身の信念と効果とが一致する見解を徹底して追究することは当然だと言えよう。

しかし、ここで問題となるのは真理の多元論である。ジェイムズはプラグマティズムの特徴である多元論を強く主張しており、宗教的経験の分析という方法論から、人によって経験する神が異なってもそれぞれを真とみなす。一方で、神が「本当に実在する」という見方は、対象が人間の認識にかかわらず実在しているという「実在論」である。多元論と実在論を両立させることは理論的に可能なのだろうか。

### 3. 実在論の問題

真理論はもともと実在論の問題と強く結びついている。というのも、「真理」のもとも古典的で基本的な理解は「観念と実在の対応もしくは一致」だからである。これを真理の対応説という。この説では、実際に存在している事物をそのまま認識・理解して

<sup>8</sup> William James, *The Will to Believe* (1897), *William James: Writings 1878-1899*, The Library of America, 1992, p.474.

表現することを「真理」とみなす。

しかし、哲学では「そのまま認識する」ということが果たして可能なのか、ということが問われ、さらに、そもそも人間の認識と無関係に事物が実在しうるのか、という問題が生じてくる。そこで「実在論」と「反実在論」という二つの立場が生まれる。

反実在論は、人間の心から独立した事物の存在を否定するか、または心から独立しているような事物について認識できる可能性を否定する立場である。つまり、事物についての知識は人間が共同体の中で運用しているだけであり、それに「対応」する独立した実在を指し示すものではないという見解であり、このとき、知識の真偽は共同体内における正当化によって判定されることになる。

この見解は先に見たローティの見解にかなり近いことが見て取れることと思う。つまり、プラグマティズムは本来、反実在論と相性が良いのである。

ジェイムズは、実在論を主題とした議論を行っていないため、明確な立場の表明はなされていない。しかし、後の諸研究からジェイムズが実在論者であったことはほぼ認められている。以下に紹介するパトナムも、「ジェイムズは、哲学におけるある種の実在論を強く求めていた」<sup>9</sup>と書いている。つまり、ジェイムズはプラグマティズムの多元的な真理観を、一見似つかわしくない実在論と結びつけて考えていたのである。

#### 4. パトナムの実在論

プラグマティズムは反実在論との相性が良いとはいえ、実在論と共に存できないものではない。その路線を強調したのがヒラリー・パトナム (Hilary Putnam, 1926-2016) である。パトナムは、20世紀中盤に分析哲学の分野で活躍した哲学者であるが、20世紀後半からプラグマティズムに傾倒し、特に晩年にはジェイムズへの関心が強かった。そのパトナムは、プラグマティックな多元論と実在論の両者を明確に論じてきたため、ここからパトナムの議論を確認していきたい。

パトナムはもともと科学的実在論、つまり科学的知識が示す世界の客觀性を認める立場であったが、1970年代にパースらの古典的プラグマティズムから影響を受け、独自の「内在的実在論」の立場に転向すると同時に「形而上学的実在論」を強く批判し始めた。形而上学的実在論では、世界は心から独立な対象の固定された総体から成り、世界

---

<sup>9</sup> Hilary Putnam, *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*, 1999. ヒラリー・パトナム『心・身体・世界』野本和幸 監訳、法政大学出版局、2005年、6頁。

のあり方についての真で完全な記述がただ一つ存在するとされる<sup>10</sup>。

それに対して内在的実在論では、認識から完全に独立したレディメイドの外的世界は想定されない。われわれの知識は経験的な入力によって獲得されるが、その入力はすべて概念を介しており、何を実在世界とするかはわれわれの価値観や関心に、部分的には決定される<sup>11</sup>。したがって、真理は独立した実在と観念との対応ではありえず、「理想化された合理的受容可能性」として規定される<sup>12</sup>。これはすなわち、物事を認識する際の現実的な制約がすべて取り去られた場合に、誰にとっても合理的と認められるであろうことが真理だということである。人間は概念枠から離れて実在を認識することはできないが、特定の文化や偏見から離れた認識を追求することは可能であり、それを想定するのがパトナムの真理論なのである。したがって、この見解は対応説を否定しつつ、相対主義的な反実在論にも与しない。

この内在的実在論は、プラグマティズム特有の「動的な」真理観、そして真理の多元性を実在論と結びつけることを可能にする。真理を価値観や関心を通した概念枠から切り離すことは不可能であり、一方でわれわれは複数の概念枠を同時に扱うため、真理は一義的に固定されえないのである。

そして、パトナムはさらに1990年代以降、ジェイムズのプラグマティズムに接近した「自然な実在論」を標榜するようになる。これは、われわれは外部世界に直接接していると考え、内部と外部のインターフェイスという仮定を退けるものである。ここでは、人は直接的に実在を知覚できる。とはいっても、その直接知覚が概念枠から自由なわけではなく、われわれが複数の実践を行う中で、複数の真理が立ち現れる。例えば、パトナムはジェイムズの書簡を引用して、テーブルの上にばら撒かれた豆をどのように記述できるかという話を挙げている<sup>13</sup>。これをジェイムズの原文から要約すると以下のようになる。

見る人はテーブル上の豆を好きなように記述することができる。ある人は単に全部を数えて眺めるかもしれないし、ある人はグループを選び目的に合わせて名前をつけるかもしれない。人がどんな記述をしようと、その豆について説明している限り、その人の

<sup>10</sup> Hilary Putnam, *Reason, Truth, and History*, 1981. ヒラリー・パトナム『理性・真理・歴史』野本和幸 他 訳、法政大学出版局、1994年、78頁。

<sup>11</sup> Cheryl Misak, *The American Pragmatists*, 2013. シエリル・ミサック『プラグマティズムの歩き方』(下巻) 加藤隆文訳、勁草書房、2019年、198頁。

<sup>12</sup> 同書、200頁。

<sup>13</sup> パトナム『心・身体・世界』、6-7頁。

説明は間違いでも不適切でもない。そうであれば、どの説明も真と呼んでいいはずである<sup>14</sup>。

こうした例から、パトナムは人間の心から独立した実在を肯定しつつ、複数の真理が述べられると理解する。この立場では、内在的実在論よりも確固とした実在を認定しつつ、多元的な真理を許容することができるるのである。

こうしたパトナムの理論は、プラグマティックな真理の多元論と実在論とを両立させる上で大きな意味を持つ。しかし、パトナムは宗教というテーマをあまり取り上げることがなく、この真理観を宗教に適用できるかどうかは不明であった。

## 5. 宗教への適用

オランダの宗教研究者ニーク・ブルンスフェルトは、パトナムのこうした実在論を解釈し、パトナムが自身の真理論から宗教的命題を除外していると指摘した上で、それにもかかわらずパトナムの実在論が宗教に適用できると主張している<sup>15</sup>。

ブルンスフェルトによれば、パトナムの基本思想は、人間の実践における命題が真である可能性を様々な形で許容する徹底した可謬主義であるという。その上で「真理」が「概念的能力と実在との相互作用に依存している」<sup>16</sup>ことをパトナムの中心概念だと理解する。ブルンスフェルトは、パトナムが宗教的な命題を除外したのは、宗教的命題の意味が特定の宗教的な概念枠の中でしか理解できないものであり、概念枠の（共同体）外にいる人には理解できないからだと見ている。パトナムにとって、宗教的に語ることはすべての人には必要のない実存的決定であって、その真理価値は特定の共同体に依存する<sup>17</sup>、というのである。

それに対してブルンスフェルトはジェイムズの宗教経験論を改めて取り上げることで、パトナムの実在論が宗教を含みうると主張する。その根拠は複数示されているが、以下に二点紹介したい。

第一に、宗教的概念の伝達可能性についてである。パトナムは宗教的真理を共同体外に伝達できないものと考えた。確かに神秘体験などは、ジェイムズが「言表不可能性」

<sup>14</sup> William James, *The Letters of William James, Vol.2*, Atlantic Monthly Press, 1990, p.295.

<sup>15</sup> Niek Brunsved, *The Many Faces of Religious Truth : Hilary Putnam's Pragmatic Pluralism on Religion*, Peeters Pub & Booksellers, 2017.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p.244.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p.202.

という特徴を挙げているように、誰にでも共有できるものではない。しかしブルンスフェルトは、「神秘体験に基づいて抱かれる命題」は伝達可能なものであって、命題が伝達できる以上、可謬的な真理の枠内で扱いうるはずだと指摘する。

第二に、そもそもパトナムの徹底した可謬主義と多元論を踏まえるならば、潜在的に真理性を持つかもしれない特定の経験を断定的に拒否するという態度は不適切だということがある。宗教的であろうがなかろうが、公共の俎上に乗せて確かめるのが適切なのである。

こうしたことから、パトナムの多元的な実在論は本来、宗教的な真理をも対象とし得るはずであり、その結果宗教的命題の多元的な真理性が保証される、とブルンスフェルトは論じている。

## 6. ジェイムズの真理論と対応説

パトナムはジェイムズを「自然な」実在論者と考えたが、宗教学者マイケル・R・スレーターは、ジェイムズを一種の形而上学的実在論者とみなす<sup>18</sup>。

それは、ジェイムズの真理論を広い意味での「対応説」だと見ることができるからだという。先述のように、形而上学的実在論は、人間から独立した実在が存在しており、観念がそれと対応することを真理とみなすことを特徴とする。ただし、ジェイムズの場合には、通常とは異なる意味で「対応」を考えている。普通、実在論における対応は必然的に絶対的なものとされる。一方ジェイムズの場合、観念や言明が実在と「対応」または「一致」するとは、①実在を指し示す、もしくはわれわれをそこに導くこと、②結果として満足をもたらすことだとみなされる<sup>19</sup>。実際、ジェイムズは『プラグマティズム』で「一致」という語を使いながら、対応説の文脈でプラグマティックな真理を語ろうとしている。

私たちの観念は、行動や行動が促す他の観念を通して、経験の他の部分の中まで、あるいはそこに至るまで、あるいはその方向へ向けて、私たちを導いて行く。そしてその間じゅう私たちは、元の観念がその経験と一致していると感じる——こうして

<sup>18</sup> Michael R. Slater, "Pragmatism, Realism, and Religion," *Journal of Religious Ethics* 36, pp.653-681, 2008.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p.661.

た感じは私たちに潜在している——のである<sup>20</sup>。

実は、ジェイムズは「対応説」を説明するときに「対応 (correspondence)」ではなく「一致 (agreement)」を多用している<sup>21</sup>。agreement は「呼応」のニュアンスを持つため、ジェイムズの「対応説」ではその対応関係が、厳密な一対一対応ではなく動的・可謬的なものと考えられていることが、そこからも推定できる。

また、スレーターはジェイムズが真理と実在の区別を明確化したことに意義を見出している。実在は確かに心から独立しているが、真理は観念に起こってくるもの、という区別である<sup>22</sup>。この見解では、「対応」は絶対的なものではない。一般的な実在論はこの対応を絶対的とみなすが、その対応がいかにして可能かという原理を説明できないことが論理的弱点となっている。それに対して、ジェイムズは「対応」を、われわれが真理に到達するための手段である行動や実践に依存する、可変的なものとして捉えるのである<sup>23</sup>。こうした形式の設定により、人間から独立した実在を認める実在論と、真理を動的で人間的なものとするプラグマティズムが両立する。

では、パトナムがジェイムズをこのように理解しなかったのはなぜだろうか。スレーターによれば、それはパトナムの形而上学的実在論の定義が極めて厳格であったためである。パトナムは形而上学的実在論を、①世界は完全に心から独立した対象の固定された全体性から成る②世界について正確にひとつの真理と完全な記述が存在する。③真理は一種の対応である、の3つの特徴を持つものとして批判している。しかし、形而上学的実在論は、単に「心から独立な対象が存在する」という見方を意味するのが一般的であるはずだとスレーターは指摘している<sup>24</sup>。

ジェイムズは宗教を実在論的に論じるが、一般的な実在論的宗教觀とは異なり、教条的な傾向を持たない。ジェイムズは、宗教的信念を常に仮説として捉え、科学との連続性を保証しようとする。スレーターによれば、科学的仮説がその参照する物理現象の実在性へのコミットメントを前提とするように、宗教的仮説もその参照する対象の実在性

<sup>20</sup> William James, *Pragmatism* (1907), *William James: Writings 1902-1910*, The Library of America, 1988, p.574.

<sup>21</sup> 「真理は…観念と〈実在〉との〈一致〉を意味している」(*Ibid.*, p.572.)など、明確に対応説に関して「一致」の語が使用されている。これについてスレーターは特に注釈をつけず、「対応」または「一致」、という表現で議論を進めている(注19)。

<sup>22</sup> Slater, p.657.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p.659.

<sup>24</sup> *Ibid.*, pp.657-658n.

へのコミットメント前提とするというのがジェイムズの立場だということになる<sup>25</sup>。

スレーターの見解では、ジェイムズの真理論は、観念と実在との対応という古典的図式の改良版であり、このタイプの対応説であれば、宗教的真理を多元的かつ実在論的に主張することが可能になるというのである。

## 7. ジェイムズの実在論

ブルンスフェルトは、パトナムのプラグマティックな実在論に基づき、宗教における多元的な実在論を可能にしようとした。スレーターはジェイムズの記述を通して、形而上学的実在論の改良版として、ジェイムズ独自の多元的実在論を解釈した。これらは、異なる理解なのであろうか。

パトナムは、ジェイムズの実在論から着想を得て「自然な実在論」の立場に至った。したがって、この点についてジェイムズとパトナムの見解は一致しているはずである。そうであれば、スレーターとの間に齟齬が生じているのは、単に言葉遣いの問題であろう。スレーターの指摘にもあったように、パトナムは極めて厳格な意味で「形而上学的実在論」を規定しているからである。

テーブル上の豆の例を考えれば、ジェイムズが真理を実在に対応する不变の記述と捉えていなかつたことは明白である。彼がその見地から構想していた多元的な実在論について、パトナムはそれを形而上学実在論とはまったく異なる見解だと捉え、スレーターは形而上学的実在論の枠内で表せるバリエーションと見ている、ということである。

特に、「対応」ということに関しては、完全に言葉遣いの問題である。ジェイムズは「対応」の関係をかなり広い意味合いで考えている。スレーターはジェイムズ自身が対応説の文脈に沿って語っているという点を重視しているのに対し、パトナムはジェイムズの考える「対応」が本来の「対応」とはまったく異なるものとして、その文脈に意義を見出していないのであろう。パトナムにおいて、真理は具体的な行動・実践の中で可謬的に見出されるものであるが、これは事実上、ジェイムズが「一致」と呼ぶ事態と同様のものと考えられるのである。

これらのことから、パトナムの「自然な実在論」はジェイムズが明確に述べなかつた構想を継承した発展系もしくはひとつの完成系とみなしても良いのではないだろうか。そしてブルンスフェルトが主張するように、ここに宗教的命題が含まれるとすれば、ジ

<sup>25</sup> *Ibid.*, p.672.

エイムズの目指していたものがこれに近似したものだということは十分に考えられる。

## 8. 結

パトナムは様々な実践において、複数の概念枠によって捉えられる実在の姿をそれぞれ真理とみなす道筋を示した。この態度は、ジェイムズが「対応」を「一致」と呼び、それを「行為の中における導き」と解した見解と相似であり、ジェイムズのヴィジョンがパトナムによって改定されつつ提示されたと言えるだろう。

したがって、ジェイムズの目指した宗教的実在論の輪郭を想定するなら、次のようなものとなるであろう。①神的存在は人間の心から独立に実在する、②人間はそれを直接的に経験するが、実践のあり方しだいで多様な概念化がなされる、③それは暫定的な真理と認められ、実際的効果の検証にかけられながら効果を発揮するものである<sup>26</sup>。

こうした見解は、プラグマティズムに基づく限り、理論的に可能と思われる。この立場を採用すれば、一般信仰者の素朴で自由な信仰が公共圏に居場所を得ることができる。そのことによって、信仰の効果を発揮する機会がより広く与えられることをジェイムズは期待していたのではないだろうか。

### キーワード

真理、宗教、プラグマティズム、実在論、概念枠

### Keywords

truth, religion, pragmatism, realism, conceptual scheme

---

<sup>26</sup> ③はパトナムの見解よりもジェイムズの考え方へ寄せて想定した。